
ブレインハッカー

篠田 一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレインハッカー

【Nコード】

N1704A

【作者名】

篠田 一郎

【あらすじ】

雑多な国籍が入り混じる近未来東京。先生と呼ばれる男が預かったのは、心を傷つけられた少女だった。

一話

東京って名前がブランドだったのは、もうずいぶん昔の話になった。頻発したバイオテロに怯えて、人は大都市から逃げ出した。居残るやつは命知らずと呼ばれた。文字通り命の価値などかけらほども感じないガキどもや悪党どもと、命の代わりになにかを得ようとする者と。やむにやまれぬ事情があると言つやつもいるが、家庭だ仕事だ行き場がないだ、どう考えたって生死の境目で考慮に値するものとは思えないが、どうだろうね？

「どうだろうねって、あたしに言われてもねえ。ほい、大根」

薄汚れた小さな掘っ立て小屋の軒先で、ばあさんは縄で吊った大根を一本突き出した。あちこちから、肉の焼ける匂いや香草香木の類、糞尿やら様々な動物のむせ返るような香りが漂ってくる。

日本って名前もだいたい価値を落としたもんだ。ここ数十年の政治の失敗、追い討ちをかける難民の大量入国、そして立て続けのサイバーテロがこの国にとどめをさした。大通りは閑散として威容を誇るビルはからっぽ、走るのは天然ガス車が信じられないような高級車だけ・・・貧富の格差ってやつは国の中身を映し出す鏡だね。それに、金持ちはたいてい悪党だ。

一方、一步裏通りへ入れば、狭い路地にこぢんまりした小屋建てで商売している不法滞在者。ばあさんたちくらいの甲斐性が日本人にもあれば、ちょっとは結果も違っていたはずだがね。

「甲斐性ってかい。商売しなきゃ生きてけないからね。だってのにこの前、都の職員が小屋の撤去だとか言ってやって来てさ。追い返すのが大変だった。なんでも都の景観利益がどうたらって。馬鹿言っちゃいけないよ。あんたら日本人より、ガイジンの方が多い町なんてゴマンとある。景観はどうだか知らないが、都民が生きてつてられるのは誰のおかげか、よく考えてほしいもんだよ。え？日本語がうまくなったって？謝謝！。さあ金払っとくれ。世辞言ったっ

てまけないよ」

財布がないのに気付いたのはその時だった。

さつきまではあった。落とした、盗まれたか。心当たり？数え切れない。この人ごみでどうやって人とぶつからずに歩けていうんだ？まあ、諸文化のごった煮みたいなのこの通りで珍品探しに没頭していたのは、確かに迂闊だったかもしれない。

「またかい」

またかいはないだろ？

「先生の財布狙うなんて、こころじゃあの悪ガキどもくらいさね。五つでもうスリの手口覚えちまって、手当たり次第つてのには困ったもんだ。あとでテイシンちゃんに取り返してもらいな。お代はツケにしとくよ。それとも、一回タダでやってくれるかい、先生？」
「冗談じゃない。経営している針灸院は格安を売りにしているが、それでも大根一本の値段と比べれば桁が違う。一桁くらい。」

「そういえば、テイシンちゃん元気かい？もう一週間も来てないんだ」

ばあさんの顔に刻まれた数え切れないしわが、てれた表情を一層ひきたたせた。自分の孫娘のようにテイシンをかわいがるこの老婆は、その心情を人に知られることをひどく嫌うのだが、実際には筒抜けだ。

この店先でテイシンと出会ったのだと、普段気にもしないことなのに。彼女の祖母のような表情をするばあさんを見ると、毎度のようには思い出す。

あの時はばあさん、動転してたな。

小さな子供が持つには大金を手に、テイシンは店のすぐわきで、通行人に懇願していた。誰か、このお金をあげますから、あたしを拾ってください・・・

「もう十年くらい経つかねえ。そう、テイシンちゃんもあの頃はあれくらいの歳で・・・」

そう言っただけで絶句したばあさんの視線追って、同じくこちらも

言葉を失った。

人ごみをかきわけるといふより、その波に翻弄されるかのようにとつとつと歩いてくる少女は、寒空には不似合いなワンピース一枚で・・・まあその格好はこの街では珍しいことではないが、その表情を見た瞬間、ただでさえ弱弱しい太陽の光が一拳にしばらく萎えてしまったような気がしたのだ。

表情を見た・・・というのは、正確には違う。少女は見るべき表情をなにもあらわしてはいなかったのだから。

伏し目がちの瞳は底のない穴ぐらを連想させる深い闇色で、あるいはガラス細工を思わせる無機質な光かとも見えた。力なくゆるんだ口元が微かに動いているのがわからなければ、一目で死体が歩いていると勘違いしたに違いない。

見たところまだ十にも満たない子供には相応しくない表情だ。・・・いや、違う。どこの誰にだって相応しくない表情だ。

「まあ、まあまあ」

ばあさんは慌てたように店を飛び出して、誰からも相手にされない少女の頭を抱き抱えた。ちよいと、ちよいと、と、少女をほったらかしておく周囲の人間をまるで責めるように声をあげる。

他の通りならいざ知らず。この世話好きでお人好しなお節介ばあさんのひとなりは有名で、それは好感をもって受け入れられているこの一角では、たちまちにして少女の周囲に人の輪ができあがった。

こんなことも一度や二度ではないらしい慣れた話ぶりで、両親はどうしたかという議論はすぐに通り過ぎ、少女を落ち着かせる場所はどこか、という激論に達した。

ばあさんは振り向いた。それはもう満面の笑顔で実に嬉しそうに「ちようどいいところに来たね、先生」

逃げたくなった。

一話（後書き）

ありがとうございました。

二話

事務所ではティシンが無聊を囲っていた。最近大きな仕事がないせいで暇をもてあましているのだ。小さい仕事では主に電話番や受付係。様子を見るに、今日も予約の電話はなかったようだ。経営状態は逼迫している。この針灸院をたたむのは時間の問題だろうか・

「お帰りい、先生。お土産は？」

黙って大根を差し出すと、今夜は自炊ですねー、と彼女は嬉しそうに流しへ向かった。大根の煮物がティシンの好物なのだ。

「あれ、この子は？」

黙っていると………機嫌が悪いんだよ。経営状態のせいではない。………ティシンはこちらの様子をうかがって、それから、こんにちはー、と少女の前へしゃがみこんだ。

妙な気がした。まるで十年前のティシンと今のティシンとが並んでいるような錯覚。そうか。あの頃のティシンはこんなに小さかったんだな。

「お名前は？」

少女の相手をしているティシンを置いて、流しへ向かった。大根の千切りをさかなに日本酒を飲むのが好きなんだ。

少女の相手はティシンにまかせればいいだろう。子供は子供同士話し合えばいい。親がわかれば返せばいいし、そうでなくてもいい。戸籍なんぞあってないようなこの街だ。名前と生い立ちを作り上げて、どこかで生きていくだろう。本名は、いつかまとまな人生を始めるとき、惚れた相手ができたとき、そんな時に必要なものではないが、それ以外では、特にこの街では、百害あって一利か二利しか返って代物だ。

「先生、これ」

しばらくして、ティシンは紙きれを差し出した。たどたどしい字

がすみっこに書いてある。

めいひ

中国系か、それとも朝鮮系か。名かあぎなか。わからないがどのみち日本名ではない。平仮名を使う辺り、それに年齢からして、日本育ちか。

「喋られなくなったんだね。なにがあつたかは聞いてないけど」

テイシンはうつむいた。

「ちよつと変なんだ。親のことを聞いたら、いきなり震えだして、泣き出して」

馬鹿。それを先に言え。

なるべく慌てた様子を見せないように立ち上がり振り向くと、少女は泣きはらした目でテイシンのセーターを握りしめていた。

しゃがみ込んで少女の頭を撫でようとすると、彼女はおこりにかかったように震えだし、テイシンのセーターを掴む手にますます力をこめた。その顔にあらわれた初めて見せる表情・・・おびえ。

親というキーワードで生まれた恐怖。目の前で殺されたか？あるいは親に虐待された？

どちらにせよ、幼い子供が抱くには、あんまりにも残酷な表情だ。機嫌がますます悪くなっていく。自覚はしているがどうにも抑えられん。

「セーター伸びちゃうよ」

そんなことを気にしているのかお前は、とテイシンの顔を見上げると、凄まじい怒りの表情と出くわした。少なくともセーターのことで怒っているんではあるまい。そんな空気。あ、ちよつと機嫌の悪いの、抑えられそう。

ともかく少女に刺激を与えないよう、事務所を出ることにした。大人がいたのでは身体検査もままならない様子だったからだ。

やはり、子供のことは子供にまかせるべきだ。

「あたしはもう子供じゃないよ」

人の心が読めるのか？そう聞くとテイシンにまわし蹴りをくらわ

された。

この世には悪党が多すぎる。

あの少女になにが起こったかわからないが、そいつを起こしたやつは間違いなく悪党だ。

もちろん、悪党がいるなら善人もいるはずだ。が、彼らはほとんど表に出てこない。野菜売りのばあさんなんぞ例外中の例外だ。なぜか？

どんな善人でも悪党のフリをして、あるいは悪党の庇護を受けて、そうでなけりや生きていけないからだ。善人ですと看板を掲げれば途端に骨のズイまでむしゃぶり尽くされる、それが世の中だ。あの老婆のような強い心か、あるいは悪党をねじ伏せる強い力か、どちらかがなければ、生きてゆけないからだ。

サテ。

少女の身体検査もそろそろ終えたらう、気持ちも少しは落ち着いたかな、体に傷でもこさえていれば事態もあらし見当がつくんだが、と考え考え喫茶店を出て、おっちらおっちらと戻った事務所は、荒らされていた。

二人はいなかった。

三話

慌てて・・・体裁を整える余裕はなかった・・・針灸院事務所の階下にある美容院へ駆け込んだ。テイシンがテイシンがとわめくと、奥からマリアが飛んできた。手に受話器を持っている。

「なんでケータイでないの、センセ！」

事務所に忘れてたんだ。

「テイシンちゃんと女の子が、車で連れて行かれちゃったよ！電話したのに、センセに電話したのに」

あとはなにやらカダログ語でわめき散らす。

すっかり動転している様子から、車のナンバーなんぞ控えてはいるまい、と聞くと案の定だ。

テイシンは無事に連れ戻すから、と逆にマリアをなだめすかした。年齢不詳の美女マリアはこんな時、ひどく幼く見えてこちらを慌てさせる。昔テイシンが迷子になったときもそうだった。

昔話の記憶を振り切って、事務所に戻ると「大きい仕事」用の道具を取り出し、特注の手袋をはめた。

恨まれる心当たり？数かぎりなくある。しかし実際に襲ってくる馬鹿にはあまり覚えがない。テイシンにだってないはずだ。では誰が事務所に押し入って二人を連れ出したのか。

タイミングからして、メイヒというあの少女がらみではないかと思当をつける。

少女をさらうことが目的だった？

根拠がないわけじゃない。事務所は荒らされていたが、それは徹底したものではなかったからだ。事務所の所有者が誰なのかを探った、まあその程度だ。

ともかく少女が事務所にいると知っている人物に当たった。簡単

だ。ばあさんとその仲間たちしかないはずだ。

当たりだった。当たってほしくない推測だった。

ばあさんは、店の中といわず外といわず散乱している野菜の残骸を、ゆつくりと拾い集めているところだった。人々はそれを痛ましそうに眺めているだけだ。ばあさんの丸めた背中が小さく見えて、なんだか泣きたくなかった。

「先生……」

殴られた痕も生々しい顔が、すまなそうにうつむいた。

「ごめんよ……あの子の行き先を教えろって言われて……あたしやイヤだったんだ。死んでも言わないつもりだったさ。でもね……ごめんよ」

立ち尽くしていると、周囲の誰かがぼそつと言った。

教えたのはばあさんじゃない、あいつさ、と。見てられなかったんだろうさ。あのままじゃばあさん殺されてたよ、と。

相手の暴力が老婆の次の標的を見つけ出す前に、彼らは口を開いていたのだろう。

ありやあいさんの部下の人だからね、という声も聞こえた。

イ。聞いたことのある名前だ。

「あの子は無事なのかい？」

ばあさんはさがるような目で見上げてきた。十年前と同じ目だ。さがるような目で、ばあさんはあのととき言った。この子を頼むよ、テイシンっていうんだってさ。

「あの子は無事なのかい？」

……無事だ。悪いやつらはやつつけたよ。ばあさんのことが心配になって来ただけなんだ。本当だ。

それを聞いて、集まっていた者は三々五々散っていった。ああよかった、先生なら大丈夫だと思ったんだ、と話し合いながら。

「あの子が無事ならいいんだよ。うん、よかった……売り物かい？いいんだよ、気にしなさんな。いいかい、野菜っていうのはね、どんなにぼろぼろになったって、食べられるんだ。栄養だってさ」

言いながら、ばあさんは泣き出した。

彼女の同郷の人がよくするように声をあげて泣きはしなかったが、老婆のしわくちやの顔の、そのしわの一本一本に、目じりから涙がしみこんでいった。

「嘘なんだろう？」

なにも言えなかった。

「・・・みんなはそれを聞いて安心するよ。あたしだってほっとする。だけど、心の中じゃ知ってる・・・みんな、あんたの顔を見ないだろ。ちらりとでも、一度は見ちまったんだ。だから、知ってる。ああ、これは嘘なんだ、って。・・・わかりやすい男だよ、先生は」

ばあさんは責めるでもなく周囲の人ごみを見やった。

「だからね、みんな、あんたの顔を見ていないフリをするのさ。だって、そうだろう？知ってしまったんだ。無事だなんて嘘だ。あのかわいいそうな子は、もういないんだ・・・」

だけれど、そうやって誤魔化さないとやっていけないんだよ・・・自分のせいだなんて、誰だって思いたくないさ・・・ごめんよ、ごめんよ、先生。だけど、みんなを責めないでくれね」

あの子は、まだ、生きてるよ。かろうじてそう言った。今度はうまく言えたはずだ。必ず連れ戻す、と。

ばあさんは愁眉を開いて、ようやく口元に笑みを浮かべた。

「本当かい？お願いだよ、先生、あんたならできるよ、あんただったら安心だ」

全幅の信頼を込めた顔だった。その信頼に答えるため、ティシンと少女をすくうため。

イという男には思い知らせなければならない。お前が敵に回した者が何者なのか。

四話

イという名前には聞き覚えがあった。

被服輸入業者で、公然と密輸をおこなうという話だ。扱う品は麻薬から銃器、動物に人間と実に幅広い。噂ではミイラも運ぶそうだが、いくらいの大物なら、街の情報屋に聞くだけで居所は知れた。もっと大物になると、町の情報屋程度では手に負えなくなる。イの不運は、小物でもなく、大物すぎるわけでもない立場で、テイシンに手を出したことだ。

衣服を剥ぎ取られ、両手両足をいっぱいに広げて縛られた少女が、ベッドの上にいた。あらゆるものを拒絶する凄まじいまでの無表情。メイヒという名の少女は、体の震えで、かろうじて生きていることがわかるという姿だった。

本来透き通るような白い肌は赤と青のまだらができていた。ありえない箇所が不自然に腫れ上がり、いくつもの傷から血が流れていた。

吐き気がした。形を変えた顔など正視に耐えなかった。幼い小さな体を責め苛む人間の心が、総身の毛を逆立たせていた。

振り返った痩身の男・・・イの、どこか間抜けなきよとした顔が、次第に落ち着きを取り戻していった。

「何者だ、貴様」

ドアを開けた姿勢のまま、しばらく声が出なかった。

「なにをしに来た？終わるまで入ってくるなと言ったろう。あと、もう・・・一時間くらいは楽しませろ」

それだけの時間をかけて少女をなぶろうというのだろうか。すでに瞳へあらわすべき心を破壊して、なお。

「見ない顔だな、近藤の手下か？」

ようやく不審をいだいたのか、イはドアの向こうを覗き込むようにして背を伸ばした。

ドアを閉める時、少し力が入った。抑えていないと、ノブを破壊しそうだった。

「何者だ、貴様？」

イが目を細め、かたわらのナイトテーブルへ手を伸ばした。そこに拳銃があることは確認済みだ。

どちらが速いか、わかりきっていた。それでも、手ははやいのだ。投げた針は正確に肩のツボを射抜き、瞬時にイの腕の自由を奪っていた。

咄嗟の行動として、逆の手を伸ばしたイの動きは迅速かつ冷静だったと言える。普通なら突如自由を奪われれば混乱するものだが。

拳銃を握って振り向いたイのうなじへ、今度は手に握った針を突き刺した。両手で握ってもじゅうぶん余りある「大きい仕事」用の針を。それだけで、イの首から下の動きを封じ込めていた。

「針師、か」

全身のツボを熟知し、利用することで体内の気脈を操り、病氣や怪我を治療する者がいる。針師と呼ばれる彼らは、同じ要領で他人の体を自在に操り、病の発症をうながすことまでやってのける。

町の針灸師程度の腕では当然不可能だから、その数は少なく、滅多にお目にかかれない人種だ。しかし、イは周知だったらしい。なるほど、さっきの手馴れた反応は、針師の技を知っていたがためか。ただ・・・イは大きな勘違いをしている。

そんじょそこらのただの針師ではないよ。

「誰の差し金だ。金本か、トトか、キムか、それとも・・・」
名前が出るわ出るわ、あちこちで恨みを買っているらしい。

警備が意外に厳重だったのはそのためか。おかげで時間を食った。一分でも一秒でも早くたどり着きたかったというのに。

少女の体を拘束する縄を、針でもって切断しながら・・・こいつはコツが必要なんだ・・・テイシンはどこだ？と聞いた。

「イはまたきよとした間抜け面でこちらを眺め、やがてなにやら思いついたのかまともに驚いた。」

「あの小娘の身内か？まさか、針師の身内だったとはな」
それから、イは吠えた。

「ふざけるな！少々腕が立つ程度で、誰に歯向かってるんだ、貴様は！たかが針師が、こんなことしてただで済むと思っているのか！」
悪党というのはみんな言うことが一緒だ。

俺を誰だと思ってるんだ。悪党だろう？ただで済むとおもってるのか。それはこちらのセリフだ。

叫び続けるイの耳元で、ぼそっと本名を名乗ってやった。あんまりでかい声で言いたくないんだ。

三度目のきよとんがイの表情をよぎり、視線が泳いでいく。

この名前は、いつも効果抜群だ。

「か・・・神に最も近い悪魔・・・貴様が？・・・ばかな・・・ブレインハッカーだと・・・！」

五話

わめくイをもう相手にしなかった。彼の視線が泳いだ先にあるドアを急いで開けた。

窓に分厚いカーテンでもかかっているのか、真つ暗な部屋だった。明かりをつけずとも、もごもごいう声で居場所はわかった。駆けつけて、テイシンの体をボンレスハムみたいに縛っている縄を切断し、口元のガムテープを剥いだ。

「先生！」

しがみついてきたテイシンの背中をさする。怪我はない。腕は？ 足は？ 無事だ。頭を調べ、頬に触れた時、指にどろりとしたものがついた。傷はない。鼻血、か。

「あの子は？ あの子は大丈夫？ さっき、いきなり声がやんだの。先生、あの子、まだ、生きてる？」

無事だと、そう答えた。

テイシンの表情は闇の中で見えないが、涙は、頬を挟んでいる手に流れてきた。

胸の中に風船がある。

激情によつて膨らむそれが、胸郭いっぱいになっても、なお怒りというエアーをそそぎこまれ続け、体を突き破ろうと胸を苦しめる。

歩けるか訊ね、少女と二人で先に駐車場へ行くよう指示する。もう、敵はいないから、安全だ、と。

少女を見たテイシンが悲鳴を上げていた。少女の体のどこに手をかけてやればいいのか、悩むようにてのひらが宙をさまよう。

さて、イをどうしてやろうか。

両手の指を鳴らして思案していると、なんとか少女をかついだテイシンが、小さな声で言った。

「先生、その変態野郎、殺さないであげて」

なんだって？と声が出そうになって、しかしその前にテイシンが苦しそうに吐き捨てた。

「そいつ、この子のお父さんなの」

なんだって？今度は声が出た。

ただの驚きじゃない。驚愕だ。

父親？父親が、なんだってこんなことを？

「自分の娘をどうしようが勝手だろうが」

悪びれた様子もなく、イはうそぶいた。

「殴ろうが蹴ろうが殺そうが、親の勝手なんだよ。子供ってのは親の所有物なんだ」

思わず殴っていた。

「殺さないで！」

少女をかついだテイシンがしがみついてくる。

ひどく腹を立てていたが、そんな自分を冷静に見つめる落ち着いた部分が、心のかたすみにあつた。そいつが囁く。

よせ。あの時にそうしたように。

テイシンを見下ろす。そうだ、あのときのテイシンはもっと小さかった。

「殺さないで」

繰り返すテイシンにうなずいてみせた。少女とテイシンとが部屋を出るまでに、三回うなずいていた。

わかった、殺さない。

特注の針を懐から取り出す。先端と頭の部分と以外を絶縁体で覆った、それでも髪の毛のように細く、特別に長い針。静電気をためて指先から放電する手袋で頭を叩くと、先端まで通電するようできている。

イは針を見つめて鼻を鳴らした。

「たかが針師が、もったいぶりやがつて」

強がりだとわかった。イは震えていた。

ふと訊ねた。なぜ、自分の娘を？

「楽しいからさ」

くくくと笑ってから、イはそうだなあとテイシンたちの出て行ったドアを眺めた。

「あのガキは肌がきれいだった。きれいすぎてな、ガマンしきれずに手を出しちまった。いつも通りもう少し我慢すれば、もっと美味い娘になってたろうになあ」

あの子一人じゃあないのか？

「子供をな、幸せいっぱい育てるんだよ。なに不自由させることなく、世の中には悲しいことなどないともないと、お前は人から愛されているのだと、順々に教えて育てるんだ。すると、子供はそれはもう、真っ白に、純粹に育つ。無垢なままに」

聞いているだけで吐き気のする話というのはあるものだ。はやく針を突き刺したいと心がせつつく。だが、まあ待て。この言葉が、この男の最後のセリフだ。

「そのガラスみたいに脆くて、水晶のように透き通っていて、小さくてまっさらな心をな、この手で、潰してしまうんだよ。今まで大好きだったお父さんが豹変する、その時のあの子らの顔つたらないぜえ。泣き叫んで、許して許してって……」

あとは言葉にならなかった。否、薄汚い言葉を針が封じたのだ。

六話

イはなにやらあーうーと唸っていた。自分が喋られなくなったことに、いまだ気付いていない様子で、口を動かしている。

針は彼の左側頭部の、こめかみと耳の上、後頭部より、それに上辺と四本刺した。治療目的では少なすぎるが、今回の目的は単純な破壊だ。それに、狙い以外の障害が起こってもかまわないと、心は割り切っていた。

特注の針は、頭蓋骨を貫通させ、知識と経験とで他の脳細胞へ傷を与えず狙った患部へと届かせれば、先端部分のほんの一点にのみ電気刺激を与えることができる。今回は、ウエルニツケ、ブローカと呼ばれる言語野と、その周辺の関連する脳細胞を焼ききった。

この男は、もう二度と言葉を発することはない。人間が言葉を操るために必要な部分を壊したのだから。書かれた文章も読めず、書くこともできない。単純な失語症ではない。失語症にはいくつもの種類があるが、彼は重複して発症したのだ。

意思表示する術を失ったこの男が、やがてすべてを失うであろうことは、想像にかたくない。しかし、あわれには思わなかった。

テイシン、わかった、殺さない。この男には、すべてを失うまでの過程を、苦しんでもらう。

神に最も近い悪魔。

そう呼ばれることもある。

自分でも、悪党と同じ種類の人間じゃないかと思うことがある。少なくとも、善人でないことだけは確実だ。

悪魔・・・それもいい。イのような男に苦しみを与え、なんの痛痒も感じないのだから。

七話

「自分の娘をどうしようが親の勝手だ！」

十年前、そう吠えた男がいた。今まで思い出すこともなかった。通りの片隅だった。酔った父親が殴りかかって、ティシンは逃げることも抵抗することもなく、体を丸めてただ耐えていた。地面に叩きつけられてもけして泣きはしなかった。

そばを通りかかったのは偶然だ。当然のように男を止めたが、しかし止まらなかった。いつそう激しく娘を蹴り上げて、へらへら笑っていた。思わず殴ったのは、ティシンの腕の火傷痕に気付いたからだ。

五、六発目に、ティシンがすがりついてきた。

殺さないで、お父さんを殺さないで。お酒を飲んでない時は、とつてもやさしいの……

翌日、野菜売りのばあさんが連絡してきた。あんたなら、どうにかしてくれるだろ、と途方にくれたように言つて。

ティシンは、子供が持つには大金を差し出して、言った。

これをあげますから、拾ってください。お願いです。お父さんが、そうしろつて言つた。ティシンが悪いから……

飲んだくれていた男の格好からすれば、彼にとつても高額な金だと想像できた。全財産だと言われても納得する。その金を渡され、ティシンはただ、父親の言う通りの行動をとつたのだ。

そして、ティシンの父は消えた。

彼がなにを思つたのか知らない。

ティシンを捨てたかった？なら自分が消えるだけでいいじゃないか。なんであんな切ない言葉を子供に吐かせる必要があるんだ？本当に、一生懸命、吐くように、ティシンは言っていたんだぞ。

それとも、本気で誰かに娘を預けたかったのか？なら、擁護施設に行けばいい。ティシンはどこにも国籍がない。それでも、なんと

かなったろうに。

テイシンがどれほどあの男を必要としていて、どれほど愛していたのか、まるでわからなかったというのか。

殺さないで。

ああ、殺さないよ。

テイシンの父は、生きていようが死んでいようが、おそらく罰を受けただろう。テイシンが父を失って傷ついた気持ちを、自身も娘を失ったことと思い知ったに違いない。そう思いたい。

そしてイもまた知る。

幼い子供が自身のすべてと言ってもいい生活、父親とやさしさと愛とその心を失ったのと同じく、イはこれからすべてを失ってゆくのだ。

一週間も経つと、メイヒという少女が事務所にいることにも慣れた。傷は残っているが一時の高熱からは立ち直り、今では、いつもテイシンの服を掴んで、あっちにもこっちにも一緒に動いていく。あの様は、金魚のうんちについていっただろうか。

少女は時折りおびえたような表情を見せる以外、顔の筋肉をぴくりとも動かさなかったが、自家製切り干し大根のきれっぱしを噛んだ時には、ちよつと頬が緩んだように見えた。気のせいだったのかね？

テイシンがなにか少女へ言っている。

「あなたはミキよ」

なんだい、それは？

「あ、先生。この子の名前だよ。メイヒ、きっと美しい姫って書くんだよお。だつてすつごく美人ちゃんなんだもの。だからね、ミキなの」

そしてテイシンはメイヒ改めミキへ微笑みかける。

「本名はね、いつか国に帰るか、好きな人ができたときのために取

つておくの。大切なものだからね。昨日紹介したマリアさんやヒョングも、みんなそうなんだから」

内容を理解しているのかいないのか、ミキは小首をかしげている。心の病の専門家が知り合いにいるが、連絡がとれない。あの野郎、いったいどこほつつき歩いていやがるんだ、とミキを見つめながら心で悪態をつく。

それにしても、堂々と本名を名乗るテイシンが言っても、まるで説得力のない話だ。

「先生が言っただよお、おばあちゃんの店の前でさ。ずっと前にそうだった？」

「テイシン、か。性はなんて言うんだ？ま、名前なんてのはどうでもいい。適当な偽名を考えておけよ。本名って言うのはな、この街じゃ邪魔なだけだ。そして、いつか自分の国に帰るなり、惚れた相手が見つかるなりして、新しい生活を始めるときに必要なものなんだ。」

本名を名乗れるようになるまでは、面倒を見てやる。お前一人じゃないからな。うちの事務所の下にいるマリアもそうだし、上にも似たようなやつがいるし・・・

ただし、自分のメシ代は自分で稼げよ。能がないなら事務所で働け。電話番号くらいできるだろ。

それから、ええと・・・そう、ずたぼろになっても野菜はうまいもんなんだ。特に大根は絶品だ。

「・・・・・・・・頼むから、もう泣かないでくれよ・・・・・・・・」

七話（後書き）

未熟な作品を呼んでいただきありがとうございました。精進いたしますので今後もお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704a/>

ブレインハッカー

2010年10月8日15時31分発行